
千壁の織り手

遙かなる歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千壁の織り手

【Zコード】

N4441Y

【作者名】

遙かなる歌

【あらすじ】

灼眼のシャナの一次創作です。悠一がフレイムヘイズになるので嫌いな方はヒターンをおすすめします。この作品は灼眼のシャナの原作を読んでいないと理解できない部分があるので読んでいる方ようつと言つても過言ありませんのであしからず。“甲鉄竜”イルヤンカが生きていたらエフものです！不定期更新になるかもしれませんのですけれどできるだけがんばっていきたいです！！

過去・大戦（前書き）

プロローグとなります。

過去・大戦

時は十六世紀初頭。

所は、神聖ローマ帝国。

封絶もまだ開発されていない時代に起きた”フレイムヘイズ”と”紅世の徒”による大戦争。

後に『大戦』^{おおいくさ}と呼ばれ、両者の記憶に深く刻み込まれるのであった。その『大戦』も終わりを迎へようとしていた……

”棺の織り手”アシズ率いる”紅世の徒”の大集団「とむらいの鐘」^{トーテン・グロッケ}の

『両翼』の二人：“虹の翼”メリヒム と ”甲鉄竜”イルヤンカはフレイムヘイズ兵团最強

の二人：

”天壌の劫火”アラストールのフレイムヘイズ”炎髪灼眼の討ち手”マティルダ・サントメール

”無幻の冠帶”ティアマターのフレイムヘイズ”万条の仕手”ヴィルヘルミナ・カルメル

と長い戦いに決着をつけようとしていた。

『両翼』の一人は『騎士団^{ナイツ}』を蹴散らしマティルダに突撃をかけた。

否、

かけようとした。

『両翼』の左…『甲鉄竜』イルヤンカはヴィルヘルミナのリボンに絡めとられて投げ飛ばされていた。

「ぬう…？」

イルヤンカはすぐに『騎士団』の展開がこの攻撃を隠すために行われたことに…

だが、メリヒムではなく、自分を投げ飛ばしたことが分からなかつた。

イルヤンカは真名の通り鎧を纏つた竜である。

投げ飛ばされただけではかすり傷一つつかないだろう。

（だつたら、なぜ儂を投げた？メリヒムならまだ有効になる可能性があるといふのに…）

イルヤンカは一瞬の内に今までの戦いで培つた勘と知識を総動員させていた。

（ヴィルヘルミナ・カルメルが無駄なことをするとは思えん…ん？）

一瞬間にかがよぎる…五日前自分はどつして深手を負つた?それは投げ飛ばされ叩きつけられたから……

(つーへーかーかー!ー)

イルヤンカが氣づいた瞬間…

「 はあああつーーー」

ヴィルヘルミナらしくない雄たけびともに豪快な蹴りがイルヤンカの腹を直撃した。

その蹴り自体は問題はない。

しかし、その蹴りによって得られた加速によってさらにイルヤンカの落下速度は増していった。

イルヤンカの落下先、それは…

形質硬化の自在法が延々と刻み込まれて桜色に発光している尖塔だつた。

「つおおおおおつーーー」

イルヤンカは『幕障壁』の展開が間にあわないと少しでも致命傷を避けるためにその巨体を捻る。

だが…

「ゴアアアアアアアア

！！」

尖塔はイルヤンカの脾腹を貫いた。

「イルヤンカ！？」

『両翼』の右…メリヒムが驚愕の声を上げる。

しかし、その声は盟友に向かつて言つ最後である「ひび」によつて遮られる。

「離れ、ろーーー！」

悪く言つと悪あがき、良く言つても最後のあがき…

そんな『幕瘴壁』をヴィルヘルミナに向かつて放つた。

「グアオオオオオオーーー！」

狙いが定まらないのか拡散させて。

「つーーー？」

「退避！ーーー！」

一人にして一人の『万条の仕手』がそれぞれ声をあげた。

イルヤンカは『幕瘴壁』の命中を見届ける前に衝撃により中ほどから折れた尖塔ともに落下していた。

そこで、古龍は意識を手放した…

イルヤンカが目を覚ましたのは数分後だった。

そこには先ほどまで死闘を繰り広げた者が共に戦を潜り抜けた戦友のようになっていた。

イルヤンカを背もたれにして。

「儂は…負けたのだ、な…」

イルヤンカは誰に言うでもなく自分の脾腹を見てつぶやいた。

どこからどう見ても戦闘は続行不可能である。

「…我々が勝ったわけではないのであります」

「危機一髪」

『万条の仕手』は独り言に律義に答える。

が、その顔はいつもの無表情ではなく、苦痛で歪んでいた。

「…つふ。 そつか…」

イルヤンカは苦笑を漏らす。

「そろそろ行かなくてはいけないのであります」

「優先事項」

ヴィルヘルミナは討滅しきつていかないイルヤンカを明らかに気にしていた。

しかし…

「行け…！」『万条の仕手』…

イルヤンカは言ひ…

「貴様はこんなとこで油を売つていていいのか？」

死力を振り絞り…

「自分のことに決着をつけひ…」

そして…

「あの男を振り向かせて来い…！…そして儂に…」

「見せ…」…「…く…」

また意識を手放した…

イルヤンカは目を覚ます。

焼け野原で。

紅蓮になにもかも焼かれてしまった場所で。

自分の主の火の粉が散っている場所で。

涙で濡れた大地の上で。

その涙が自分のものだと気づくのに少々時間を要した。

「……」

無言の中紅蓮が燃えている音だけの中を考えた。

主が愛した人間とはどんなものなのか？主が憎んだ人間はどんなものなのか？

考えても出てこなかつた……

だから……

イルヤンカは自分で”見る”ことにした。

そうして”甲鉄竜”イルヤンカはもう忘れてしまったかもしない

人化の自在法を使った：

第一話・始まり（前書き）

イルヤンカの口調が難しいです（泣
でも、挫けずやります！！

第一話・始まり

時は春休み。

坂井悠一^{さかいゆういち}は自分以外の人と物の時間が止まっている陽炎のドームの中にいた。

そのドームの中で動くものは二つ、

一つは自分、坂井悠一

二つ目は異様な怪物…？

悠一は異様な怪物の姿を見て硬直しながら考えた。

なぜ自分以外の人と物がとまっているのか？あの怪物はなんなのか？まずこれは現実か？

結論…

「そうか…夢か」

人間、処理できない事態に陥ると現実逃避を始める。

悠一も例外ではなかった。

夢から覚めること願いつつ自分の頬をつねつた…

「つづー？」

夢（幻想的な願い）は覚めて現実（陽炎ドーム）に舞い戻つただけだった。

？」

異様な怪物が悠一の気配に気づいた。

卷之三

悠一はもう笑うしかなかつた。

メ...ツ...ド...カ...グ...」

異様な怪物はなんらかわけのわからないことを言つてゐるが悠一の耳には入つてこなかつた。

た
だ
:

「アルジ……ノ……カタキ……」

危機だけは感じていた。

悠一は自分の終わりを感じ目を閉じた。

いいことを考え
こんな絶えり方を迎える人生なんて貴重じゃないか? などと、でも
ほど悟つていた行動だつた。

聞こえた断末魔は自分のものではなく……

異様な怪物のものだつた。

「…トーチとフレイムヘイズの区別もつかなくなるほじまどとは…
…哀れだ。」

さつきと変わったところが一か所あつた。

一つは何故か自分の前に立っている老人。

——田は地面から生えて岩に垂れ下がっている異様な怪物

- 10 -

悠一は混乱した。むしろ混乱するなどいう方が無理な気がする気がした。

「すまない…すぐ終わる待つておれ…『旅する宝の蔵の少年』よ」
ニーステップ

?

悠二は老人の言葉のすべては理解できなかつたがじつとしていればいいことはわかつた。

「…哀れな燐子よ。最後はこの儂が見とつてやる」

「アルジロー——！」

「『主』か……貴様と儂は似ているのかもしかんな……」

少し老人は躊躇つてから……

「そりばだ——哀れな燐子よ……」

地面に手を叩きつけた。

そして、

ドドド……！

また地面から岩が生えていった。

やがてそれは鈍色に炎となつて消えていった。

異様な怪物と共に……

「さて、少年……」

老人はまた躊躇つてから言つた。

「この世の本当のことを探りたいか？」

悠一は無意識の内に首を縦に振つていた。

「僕は既に死んでいるだつて！？」

悠一たちとはある力フュームに来ていた。（悠一の奢りで）

悠一はこの世の本当のことのある程度聞いて驚愕の声をあげた。

「…大声控えた方がいい」

悠一は周りを見渡してから

「…すいません」

「まあ気にするでない」

「…あなたの話の通りだとあなたも”紅世の徒”で人間を喰らつて生きているんですね？」

「…少し誤りがあるな」

「へ？」

悠一は間抜けな声をあげた。

「僕は”紅世の徒”の中でも格別強い力を持つていたので”紅世の王”と呼ばれ

「いの」

老人はそれとつとつなげる。

「儂は二〇〇〇年の人間を喰らつていない」

「へ？」

悠一は今日二度田の間抜けな声をあげる。

一度田は御崎市のヒロシコップであげている。

「やつこいつと”紅世の王”となふえず”紅世の徒”にもなる力しか持つていないが」

「やつを倒したのは？」

「あれは”燐子”といつ”紅世の徒”が作る道具や使い魔のようなものだ」

「……あなた名前は？」

「は？」

今度は悠一が驚愕の声を上げさせる番だった。

「名前あるんだろ？ 呼びたことない……なんとか」

「ああ、やつこいつ」とか……

「で、なんていうんだ?」

「儂の名は、甲鉄竜”イルヤンカ”といひ」

「”甲鉄竜”?」

「”紅世の徒”のもつ真名とつものだ。もちろんかぶつてゐるものはない。つげくわておぐ今は人化の自在法をしてるため竜の姿ではないぞ」

「結局どうでよべばいいんだ?」

「イルヤンカでよい」

「じゃあ、改めてイルヤンカ」

「なんだ?」

「なんで僕を助けたんだ?」

悠一は話を聞くにつれてつもつていつた疑問をぶつけた。

「……儂には仕えるべき主がいた」

「”紅世の王”誰かに仕えるのか?」

「ああ、主は今は亡き”紅世の徒”の大集団「とむらいの鐘」トーネン・クロッケを納めていた」

「……」

悠一は黙つて聞いていた。

イルヤンカの顔がどこか悲しそうだったから。

「その集団の『両翼』の左として主のために腕をふるい数々の”フレイムヘイズ”をこの手にかけてきた」

「”フレイムヘイズ”つて”紅世の王”が人と契約して”紅世の徒”を狩る復讐者だっけ？」

「うむ、その通りだ。契約した”紅世の王”はこの世と紅世のバランス保つために契約していることも話したな？」

「うん。で、イルヤンカは今までどうして來たの？」

「今までとは？」

悠一は意図してイルヤンカに過去の話をやめさせた。

「『主』のために腕をふるつた後

「ああ、その後はトーチを積みながら生きながられた」

「……トーチ、か……」

悠一は自分の胸に宿る灯を見ながらつぶやく。

だが、絶望はしなかった。

「……なんで、人を瞼らわなかつたの？」

「……人の可能性を見たくて、な」

「……」

「……」

一人はしばりへ無言になり、やがて悠一が口を開いた。

「ありがとう」

「はて？」

「『』の世の本当の『』を教えてくれて」

「普通は終わりを運んだものとして儂を恨むものだがな……」

「恨む要素がないじゃないか。これから的人生をどうやって生きて
いけばいいかわかった
んだから」

イルヤンカは少し考えるような仕草をしてから

「ふ、ふ、ふふ、そつか……なら変わりと言つてはなんだが……」

忍び笑いを漏らしながら悠一に要請をした。

「『い』の町の『い』と教えてくれないか?」

悠一は困った顔をして

「無理かな」

「……」

「『い』めん。僕は隣町の御崎市に住んでいて『い』に来たのはたまたまなんだ」

「ふむ。では、その『御崎市』とやうに行こう

「今からだ!」

「今からだ!」

イルヤンカは少し機嫌が悪いように見える（拗ねているだけだが）

ともかく悠一の目的の『い』は買えないよつだ。

「『』が『御崎市』か…」

「どうしたの？」

「この町に”紅世の王”がいる」

「へ？」

今日もひどく度田となる驚愕の声をあげる悠一。

「それにトーチの数も異様に多い……なにか田代があるのか？」

「……」

悠一は友人や家族のことを心配したが今はどじつよつもないと割り切つた。

「まあ、今の儂に関係ないが。では、案内を頼むしよう。少年

「わかったよ……。それとその『少年』って言つのやめてくれないか？」

「ではなんて呼べばよい？」

「『悠一』で頼むよ。いつもイーラヤンカつて呼んでるんだしさ」

「では、悠一。頼んだぞ。」

「うん」

「じゃあ、僕はそろそろ帰るか」ひ

「うむ、今日は世話をなつたな」

「ああ、因果の交差路で…」

ブオオオン

別れを告げていた一人を包んだのは陽炎のドーム…

『封絶』だつた。

第一話・始まり（後書き）

悠一のイルヤンカに対する口調はリリーに対する口調と同じ感じになりました

第一話・契約

『封絶』…それは因果の孤立空間を作りだし周囲から時の干渉等つけなくなり壊れたものも

『封絶』を解く前なら修復できる（存在の力を失ってしまったものは不可）

つと、悠一はさつきイルヤンカに聞いたことを思って出していた。

『封絶』の周囲には黄緑色の火の粉が舞っていた。

「ヒィィィヤハアアアーー！」

「「ーー？」」

悠一とイルヤンカは頭上からの声に同時に身構える。

「ドンーー！」

上から降ってきた”徒”と思われる者は青年の身なりをしていた。

「さつすが、俺様！ーー」の気配^{けはい}隱蔽^{いんぺい}の自在法に余念がないぜーー封絶張るまで

気がつけねえなーーおいーーー！」

「「……」」

悠一はこんな”徒”がいるのか？と思いつい黙り。

イルヤンカは今の状況を打破する方法を考えていた。

「おー・おー・そーの”紅世の徒”さんよーー存在の力よーせーーー」

「……なぜ貴様にやらねばならぬ」

「は!? 人から喰つても微々たるものんしか得れねエから”徒”狙つてたらお前がいたから」

「…… どうか『同胞を喰らう者』つとこいつわけか」

「うめーとづーーでもつて死ねーー！」

青年の姿をした”徒”は黄緑色の炎弾を放つてきた。

え！？

イルヤンカは悠一を抱えて横に飛ぶ。

「おい！おい！」『ステス』なんて所詮『トーチ』だろ？なに庇つてんだよ……！」

そう言いながら”徒”はまた炎弾を放つた。

「悠一！逃げるぞーー！」

「え、うん…」

確認をとつてからイルヤンカは前方に『幕瘴壁』を張つた。

『幕瘴壁』は全ての炎弾をうけてもビクともしなかつたが…

「そんなの張つても上から撃たれちや～意味ないぞ…！」

ビビビビビビビ…！

”徒”は『幕瘴壁』を乗り越えて炎弾を複数放つた。

が、そこには炎弾で抉れた道路しかなかつた。

「ツチ！…だけどまだ封絶内にいるみて～だな…！俺様から逃れられると思つなよ…！」

「はあ、はあ、はあ」

悠一は力の限り走り疲労しきつていた。

「悠一、大丈夫か？」

「だいじょばないかもね、ははは」

悠一は人生の終わりを感じイルヤンカに問う。

「……この状況なんとかできる?」

「正直無理だ。儂の『幕障壁』も張れて一回、生き残る術はほぼないな…」

「ほほ?」

悠一はイルヤンカのはつきりしない回答に疑問を抱く。

「悠一…」

イルヤンカは問う。

「今、力を得れるとして貴様はなにを望む?」

悠一は答える。

「……みんなを護りたいかな」

イルヤンカは再度問う。

「悠一…その先になにを望む?」

悠一は再度答える。

「……できれば」」で、」の町でみんなと共に過ぐしたい」

イルヤンカは確認をとる。

「……貴様のことをその『みんな』が忘れてもか？」

悠一は即答する。

「ちょっと寂しいけど、いい。僕がみんなを守れるなら」

「……自分を喰らった者に対する復讐のためではなく、護るために力を使うのか？」

「僕がみんなを護れるようになるための過程だと思つなら、僕を喰らつた”徒”に感謝するかな」

「……そつか

イルヤンカは では と続ける。

「力を望むか？」

悠一は答える。

「望む」

イルヤンカは満足そうな顔をして呟つ。

「条件がある
「条件?」

「死ぬな。そして、貴様の可能性を儂に見せろ」

「わかつた」

イルヤンカは500年ぶりに人化を解いた。

「……それが君の本当の姿?」

「うむ。これぞ”甲鉄竜”の真の姿だ」

そこには”甲鉄竜”の真名に相応しい巨大な竜がいた。

「…始めるぞ。契約を望む者よ」

「…うん」

「儂に身を委ねよ」

「うん」

「儂に器を差し出せ」

「うん」

「儂を求めよ」

「うん」

「…貴様の望みは?」

「みんなを護ること」

悠一は続ける。

「イルヤンカ。君の望みは?」

「……儂の望みは…主が愛し、好いた人間の、主が憎み、嫌った人間をこの目で、自分の目で見ていただきたい。その可能性を見ていただきたい」

自分の500年間生きながられてきた意味を語った。

「わかった。じゃあ、僕はなにをすればいい?」

「儂を求めよ……」

鈍色の炎が悠一を包む。

その炎が右手首に集中していき、それに比例してイルヤンカは少しずつ薄くなつていき透明に近づいていった。

「（自分の中の何かが失われていく）」

「（でも、嫌じゃないな）」

悠一は鈍色の炎の中そな」とを考えていた。

「（いやつ本当にトーチか…？それにしては器が大きすぎる……）」

「（そつか…、悠一、お前は『変革を起こす者』だったのだな。トーチでもこれほど の器を維持できる者は他に考えられない）」

イルヤンカは悠一の器に収まる際少しだけ悠一にサービスをした。

そして…

「成った」

イルヤンカがそう言つた時には悠一の髪と瞳は鈍色になつており、右手首にはガントレットのよつなものがはまつていた。

防具といつよりアクセサリーに近い感じではあるが。

「悠一くるぞ…」

ガントレット状の神器”ティラネン”からイルヤンカの声が発せられる。

「え…？ イルヤンカどこの？」

「細かいことは後だ…！」

「エエ…たぜ…！ 急に”テッケー”徒”が現れるだから…」

”徒”の遅すぎる到着により戦いの火ぶたは切つて落とされた。

「悠一……イメージだ……儂の『幕障壁』をイメージしろ……」

「そんなこと言つたで！？無理だつて……」

「よえ～～～な！新米フレイムヘイズ！～！」

悠一は”徒”の炎弾を必死によけるの精一杯だつた。

「…炎弾ならいけるか？」

「それならまだいけそう……！」

「避けてるだけか～～～！～フレイムヘイズ！～！」

炎弾はコンクリートを抉るだけだが悠一は疲労していく一方である。

「…炎をイメージして」

「ん～？なにしてんだ！～フレイムヘイズさんよ～～！」

「放つ！～！」

悠一は初めて異能の力を使った。（まあ、フレイムヘイズ特有の人體強化していたが）

その炎弾はあまりにも…

大きすぎた。

「な、なんだ」「りや……あぶねえ……な……おい……」

炎弾と呼ぶには大きすぎると炎弾は”徒”の横を通りすぎて封絶内の虚空に消えた。

だが”徒”的注意を惹きつけて、次の炎弾の用意する時間は作れた。

「はあああーー！」

今度の炎弾はさつきのものより一回り小さくなっていた。（大きいことには変わりないが）

「そんなのはなーーきかねえよーー！」

”徒”は下から撃たれた炎弾に向かって何発かの炎弾を撃ち込んだ。

炎弾同士がぶつかり、弾けて爆発した。

両者に立つた外傷はなかつた。

だが、これが”徒”に致命傷よりもきつい結果になるのだった。

「（炎弾を僕は一発ずつしか撃てないから手数で負ける）

「（かといって大きいやつを撃つても今みたいになる）」

「悠一は爆炎の中考える。

「悠一。フレイムヘイズと”徒”は基本的にイメージした力を行使する。だから……」

「血惚れてみる、思わぬ力が出るやもしれん」

イルヤンカは助言と言えない言葉を囁く。

でも、悠一にとってはとてもありがたいものだった。

「（炎を吐き出すだよな……）」

「（やるんだ……）」

「（できるかな？いや、違うよな……）」

「（おおおおおおおおおおお……）」

「の10秒あまりの出来事は両者運命を変えた。

悠一の右^{みぎ}手^て、神器”ティラネン”から炎が噴き出す。

そして、それは悠一の右掌で自在式になつた。

「だああああああああ……」

悠一は雄たけびと共に右手を”徒”に向かって突き出す。

同時に自在式が稼働した。

「な、なんなんだよ……」これはよー！？

悠一は使つた自在法は炎弾に近いものだつた。

ただ自在式から高密度の炎が一直線に噴き出すだけの単純なもの。

故に力負けしている場合は防ぎようがない。

避けるという選択もあるがそれはこの”徒”にはとれない。

それほど鈍色の炎は速かつた。

「こんなのがつて——ね

”徒”は断末魔をあげる前に鈍色の炎に呑まれた。

「はあ、はあ、はあ～」

「よくやったと言いたいが

「なにか、まだ、あるの？」

「貴様が吹き飛ばした街の修復がな」

「……」

封絶内は基本的に修復できる。しかし、存在の力を消費する。

つまり……

壊した分だけ存在の力を消費して、疲労する。

「あそこまでの威力が出るとは儂も思わなかつたが……

「それよりも封絶が解ける。引き継ぎをしろ」

「えー？ 解けるって！？ 引き継ぐって！？ なぜいつて？」

「封絶内の空間を支配する感じで存在の力を込める」

「う、うん。わかった」

悠一は目を閉じた。

その瞬間封絶を作っていた炎が黄緑色から鈍色になつた。

「はあ～～。修復はどんな感じでやればいい?」

「簡単だ。封絶内の空間に存在の力を放ち、戻れと念じる」

「わかつた」

「悠一は再度目を閉じて…

「戻れ」

と囁いた。

それと同時にビデオテープを巻き戻した時のよつて街が直つていつた。

数秒後には戦いなんてなかつたよつて完全に直り切つた。

「ふう～～～」

「初陣にしてはなかなかだつた」

「ははは、ありがと～」

「悠一は渴きつた笑みでしか答えられなかつた。

それほど疲れていた。

「帰つて寝よ」

「封絶を解け」

「わかつた」

悠一は解けろと念じ、封絶を解いた。

「で、いじは?」

悠一は周りを見渡した。

そこには『坂井』の表札があった。

「自信を持って。貴様が護つたのだ」

「……うん」

悠一は少ししだけ元気がわいてきたような気がした。

そう。気がした。

「あらあら、悠ちゃん。どうしたのその服?」

悠一の母『坂井 千草』が玄関から顔を出す。

「えへへと……いけた?」

「ふふふ、それは大変ね。お風呂沸かすから入りなさい」

千草は抱擁力のある笑みを浮かべて家中に入つていった。

「……あれが貴様の母君か…」

「なんか文句でも」

「いや、とても親子には見えんな」

「よく言われる」

他愛もない会話をして悠一たちも家中へ入つていった。

チャプンッ

「生き返る〜〜

悠一は風呂で伸びをしながら緊張感が完全に抜けた声をあげた。

「…死んではいないぞ」

「…死んでもおかしくなかつたんだから表現としては間違つてないだろ?」

「…死んじつものか?」

風呂の中にも持ち込まれて居る（ところが外れない）神器”ティラ
ネン”からイルヤンカ
が疑問いつ。

「そうこのつものなの」

悠一は極楽気分で少し疑問に感じたことを言った。

「フレイムヘイズって契約者の過去・現在・未来を”紅世の王”に
奉げて”王”がその空
いた器に入るんだよね？」

「つむ」

「じゃあ、普通はみんな僕のことは忘れるよね？」

「そうだ」

「じゃあ、母さんは僕のこと忘れてないの？」

それに気づかず普通に家に入った悠一も悠一だが…

「それは契約の際に儂が貴様の居た所にフレイムヘイズとなつた貴
様の存在を割り込ませ
たからだ」

「存在を割り込ませた？」

「まあ、今まで通りに生活できると想つてくれればよ」

イルヤンカは風呂に入った際に風呂の中に神器を沈められたといつ奇襲をうけていた。

（悠一には悪気はないが）

その仕返しなのか親切に全てを説明してくれない。

「ふうん」

仕方なく納得した悠一は今度はわざとイルヤンカ（神器）を湯の中に沈めた。

「な、なにをする…？やめんか！」

「ははは」

「笑い事ではない！」

「じゃあ、風呂から上がつたらフレイムヘイズのこととか教えてくれる？」

「知らん、自分で調べろ」

イルヤンカは怒りを含んだ声を上げた。

しかし、悠一はいい笑顔で右手を下げていきながら…

「ごめん、聞こえなかつたからもう一回言つて」

と言つた。

イルヤンカは…

「わかつたと言つたのだ」
折れるしかなかつた。

「で、この神器つていうのがイルヤンカの意志を表層上に持つてく
るものってこと?」

風呂から上がつた悠一はイルヤンカに約束通り（半分脅したが）フ
レイムヘイズについて教えて
貰つていた。

「うむ。それより大事なことを教えたはずだが?」

「神器には感覚が通つてゐだっけ?」

「そうだ」

イルヤンカは神器を沈められたことを恨んでいた。

「フレイムヘイズには称号があるんだよね?どんなやつがあるんだ
?」

「例えば『炎髪灼眼の討ち手』や、『万条の仕手』などだな」

悠一は疑問をぶつける。

「僕らにはないの？」

「ない」

「なんでも」

「フレイムヘイズの称号」とこののは自発的につけたものではなく他人に付けられたものがほとんどだ

「へえへ、じゃあ称号が付けられるのは当分先だね」

「いや、実はもうあるのだ」

「へーー？」

悠一は今日は驚きっぱなしのよつな『気が』していた。

「『千壁の織り手』これが僕らの称号だ。」

「元からあつたの？」

「いや、契約の時に考えた」

「あの短い間でー？」

「つむ。それに契約とは実際は短くとも、『紅世の王』にはながいものなのだ」

といつても1分ぐらいの体感時間である。

「名前の由来は？」

「主を護る千の壁を築いた儂との街を護る千の壁を築くであろうつ貴様を掛けた。織り手は主の名から取つた」

「主つてよく言つけど誰なの？」

イルヤンカは少し黙る。

悠一はまた悲しい顔をしたイルヤンカに気づき、

「『』、『』めん。」

謝る。

しかし、

「よい。いつか話すのだ、早い方が良かるつ」

つと聞いて自分の仕えた主のことを口に出す。

「……儂の主の名は『棺の織り手』アシズ。」

「『棺の織り手』？ってフレイムヘイズみたいな名前だけど？」

「主は元フレイムヘイズだった。だが、自分の契約者を人間に殺さ

れた」

悠一は絶句した。

「……人間について護つてたものに殺されたってこと…？」

「そうだ」

イルヤンカは続ける。

「これが他のフレイムヘイズだつたらよかつたかもしけぬ

「……どういう意味だ？」

悠一は『他のフレイムヘイズだつたらよかつた』つとこいつ言葉に少し腹を立てた。

「主との契約者は愛しあつていた」

「……」

悠一は言葉の意味を理解し、腹を立てた自分が少し恥ずかしくなつた。

「愛した者を護つていたものに殺された激怒した。そして、周りにいた人間を喰らい、この世に顕現した」

「欲望の肯定こそが全ての”紅世の徒”は主に贊同した。儂もその内の一人であった」

「その数は増えていき「とむらにの鐘」になつた。」

「その集団の願い『壮拳』は…主の願いは…」

イルヤンカは悔しそうな声で言つ。

「主とその契約者”テイス”の間に子をなすこと」

「子？」

今まで黙つて聞いていた悠一があり得ない言葉を聞いて聞き返す。

「そうだ。その子を『両界の嗣子』と呼んだ」

「そんな」とでもねのか?」

一できる。貴様が想像しているものとは違うがな」

ここまで話してイルヤンカは一息ついた。

キリが悪くてすいません

第四話・悠ひや（前書き）

今日はやたら短いです。

あとがきにアンケートがあるのでできれば答えていってください。

第四話・悠ちゃん

イルヤンカは少し黙つてから

「最後の戦い『大戦』で『両界の嗣子』の誕生をまじかにして…フ
レイムヘイズ

『炎髪灼眼の討ち手』によつて討滅させられた」

イルヤンカは寂びしそうな声で使う言つが、半分踏ん切りがついた
ようにな

「これが儂の『主』の大まかな説明だ」

つと言つた。

悠一はイルヤンカの話を聞いて…

「ありがとう」

つと言つた。

「…？」

イルヤンカは無言で言葉の意味の説明を求めた。

悠一は察して答える。

「話たくない」と話をしてくれたから、断ることもできたのに話しててくれたから

悠一はだからと黙つて続ける

「ありがと」

「……貴様は『主』の話を聞いてなにも思わないのか？」

「うへん。一途な王だなあかな」

イルヤンカは少し黙つた。

しかし、さつきの沈黙と違ひ驚愕の沈黙だった。

だがそれはすぐ破られた。

「ふつ、はは、ははははははー」

イルヤンカの笑い声によつて。

悠一は少しごじけたよつた声を上げる。

「なんだよ…おかしこ」と言つたか？」

「言つたさ。言つた。大いに滑稽なことを言つた。最悪と言われた
”紅世の王”の一人を
一途な王とはな

「まつ、いっか。でも…笑いすぎじゃない？」

まだ、笑つてゐるイルヤンカに非難の声を上げる。

それと同時にもしイルヤンカが竜の状態でこんなに笑ってたら街が大変ことになるだらうなあつといひでもいこことを考えていた。

「は、はは、はあー。すまないな笑いすぎた

「……もう二回よ。一回寝る。」

「悠一はわつわよつ不貞腐れながりもて降つる。下からのぬからりの呼び出しがよつとあるが……

「悠一せひせん。」飯できたわよー

「寝ないのか?..ゆーちやん

「……」

「悠一はわいりて不貞腐れながりもて降つる。

「……」

悠一はベットに倒れ込む。

母がトーチでないことが確認できて安心したのも異常の原因だらう。

「……やつもいかん」

「つえーー?」

悠一はまた眠りを妨げられる。

「『』の街で、『王』が『』こととは話したな?」

「うふ

「乱獲者ことってフレイムヘイズは邪魔な存在でしかない。つまり、

”王”がここに攻め
にくる可能性がある

「……」

悠一は護るべき力を護るべき者が巻き込まれてしまつことを恐れた。

「失いたくないのだらう?..」

悠一は肯く。

「では今日から鍛錬の開始だ。儂のフレイムヘイズなら『幕障壁』
かそれに類似したものが
使えるはずだ。まずそれを使えるようじつけ

悠一の濃密な春休みは始まりを迎えた。

第四話・悠ちりやん（後書き）

アンケートを何個かとります。

一つ目・あと何話か春休み編を書く。それともすぐさまシャナを出す（原作一巻になる）。

二つ目・悠一がフレームヘイズになつたことにより『平井 ゆかり』が生き残ります。メインヒロインはシャナのままですが平井さんをサブヒロインにするかどうか

三つ目・吉田の登場回数（私が書くと少なくなつますが、多くしてほしいと要望が多ければ原作ぐらいにはしていきます）

四つ目・吉田をブラックにするか、元のままにするか。

これで今回のアンケートは終了です。これから何回かアンケートとりますので
ご協力お願いします。

第五話・自在法（前書き）

アンケート結果が集まらないため、一応春休み編を続けてほしいって意見が強かつたので春休み編を書きます。

悠一はイルヤンカに言われた通りに自在法の特訓をしようとしました。

そり、しようとした。

つまりできないうじだ。

意氣込んで特訓しようつと思つていた悠一は一步間からつまづた。

「……なこをすればいい？」

悠一は恥ずかしこのを隠してイルヤンカに聞く。

「……つむ、まづ小さく封絶を張れ」

「わかった」

悠一は坂井家を包むべりこ封絶を張つた。

「…それで？」

「あ、ああ」

イルヤンカは実は悠一を試すつもりで「小さく封絶を張れ」という命令をだした。

が、悠一はなんの苦もなく小さく封絶を張つた。

封絶は張れたとしてもなかなか力の加減までは慣れるまではできないものだ。

それができるとこ「」とは……

「（咄嗟の自在法といい、今の封絶といふ……こいつは本当にただの人間だつた者か？時間を掛ければ『弔詞の読み手』を超えるやもしれん）」

「イルヤンカ？」

「（しかし、こいつは元トーチで常に少しづつ存在の力を消費している。フレイムヘイズの力で消費を回復が上回っているが戦闘時に障害になることは変わらない）」

「あの～、イルヤンカさん？」

「（しかもこの街には”王”がいる。いちまでもフレイムヘイズを見逃してくれとは思えん。普通は今すぐにでも排除しにくるはずだ。それをしないといふことは……他に優先すべきことがあるつとこ「」とか）」

「……」

「（だが、これは憶測でしかない。軽視しては足元をすくわれるが……今來ていないと、事実は変わらんのだ。）の時間を利用してこやつを鍛えなければならぬな）」

「イルヤンカー！」

「なんだー！」

悠一の声にイルヤンカ怒声を上げる。

「なんだー！ってそれで？って聞いてから返答がないから呼んだよ
…」

「ああ、すまぬ。少々考え事をな

「考え事ねえ…まあいいや。それよつこの後は…」

悠一はさうと聞かれたくなことなのだからと黙って話を打ち切る。

「先の戦いで使った自在法を今出せるか？」

「えー？あれを今…？」

「馬鹿者。自在式だけ、もしくは小規模だ」

「ですよね」

悠一は少ししぶしぶた口調ながらも夕方の戦いのことを黙て出す。

「（あの時にイメージしたのはイルヤンカの本来の姿）」

「（みんなを護るために自分が生きる）」

「（やのための自在法……）」

「まつ……」

神器”ティラネン”から火の粉が噴き出し悠一の手に集まり自在式となつた。

でも、炎ではない。完全に悠一は制御できていた。

「…ふむ」

イルヤンカはやはりとこつた声を上げる。

自分の契約者坂井 悠一は自在師の才能に富んでいた。

それに少しだが”王”に勝てるかもしないという希望を抱く。

が、そんなに甘くないと考えを改める。

「悠一。貴様はその自在法の特訓をあまりしなくてよ」

「へ？」

自分が完全に制御できていることを知らない悠一は素つ頬狂な声を上げる。

「代わりに『幕瘴壁』をなんとかして使えるようにしてもらひ

「えー？」

悠一は驚きながらも疑問を感じていた。

「『幕瘴壁』ってあの辺出すやつだよね？」

「そうだ」

「じゃあ、イルヤンカの自在法だよね？」

「当たり前だ」

「僕が使えるの？」

「フレイムヘイズは契約した”王”の力の影響を受ける。故に似た力、または同じ力使うことが多い」

「へえ～」

悠一は納得と感心の表情をした。

「故にやううと思えば『幕瘴壁』を使うこともできる

「…でも、難しいだろ？」

「当たり前だ。儂の『幕瘴壁』は500年前では”最硬”的自在法と言われていたのだ」

「最高？」

「貴様が考えているものとは多分違う。最も硬いといつ意味だ」

「ああ～。つて、えええええ！」

「悠一は今日3番田ぐらこに驚いた。

「イルヤンカつてそんなに凄いの！？」

「……貴様」

イルヤンカは静かに怒る。

だが、それに気付かず驚いている。

「そんな自在法使えるわけないじゃん！？」

「使えるようになれ」

悠一は気づかない。

自分の才能に。

「貴様は『幕瘴壁』を2回見ている。これはかなり大きな糧となる
だろう。

貴様の力という多飯喰らいへのな

イルヤンカは怒りを鎮めて諭す。

無知な契約者に。

「…できるかな？」

「やれ。そうしなければやれるものもやれん」

「わかつた」

イルヤンカの不親切な言葉がなによりも心強いつと感じてしまった
悠一だった。

第五話・自在法（後書き）

アンケートまだ受け付けてます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4441y/>

千壁の織り手

2011年11月21日11時35分発行